

校名：鳴門教育大学 附属小学校

所在地： 〒770-0808 徳島県徳島市南前川町1丁目1番地

電話番号：088-623-0205

記載日：平成28年5月20日

記載者：安田 哲也

記載者役職： 校長

貴校の校風、おおまかな特色について：

本校は、明治8年に開校した名東県師範学校附属幼年学校から数えて、昨年で140周年を迎えた。戦後は、徳島大学学芸学部附属小学校、同教育学部附属小学校、その後、鳴門教育大学へ移管され、同大学学校教育学部附属小学校を経て、同大学附属小学校となった。この間、校名は変わったが、一貫して、昭和24年～39年に本校校長であった河原貞夫氏の提唱した「人間学校」の理念に基づき、児童が、尊き人間性、知性、創造性及び道徳性を発揮して、自覚的に自己を形成して、理想的人間に近づく教育をめざしている。

校地は、古くからの市街地に立地しながらも、すぐ隣に城山を中心とした徳島中央公園や川辺を利用した水際公園などがあり、自然豊かな環境にある。また、阿波踊りや遍路道など、古くからの地域文化に触れる機会も多く、郷土愛を育む一助となっている。

貴校の卒業生の活躍状況について：

- ①追跡調査はしていない。
- ②状況の把握は、十分にはできていない。当時の担任への便りや同窓会での情報などにより知り得る程度である。得られた情報は、学校および同窓会でもっている。
- ③現徳島県教育委員会教育長をはじめ、政治、行政、医療、法律、企業経営、教育等の様々な分野において、県内外で活躍している人物は多い。

貴校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

- ①追跡調査はしていない。
- ②勤務経験者の状況は、年1回の懇親会案内の連絡時や、それぞれの教科部会等の開催時に入手できている。その情報については学校でもっている。

③勤務経験者のうち多くの者が、その後に県教育委員会や各市町村教育委員会において教育行政に携わっている。また、公立学校の現場においても、その学校や小学校教育研究会各教科部会の事務局において中心的役割を果たしている。さらに、県内各市町村の教育委員会教育長に、本校の勤務経験者が就任することも多い。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

1 はぐくみ活動

本校の六年生は、朝早く登校し、学級単位で3種の活動を行っている。ひとつは「愛」の活動。玄関ホールに雑巾がけをする子どもあり、入り口で挨拶に立つ子どもあり、草抜きをする子どもあり…。思い思いの学校内でのボランティア活動である。もうひとつは「生」の活動。生き生きと体を動かし健康体をつくる活動である。例えば縄跳びやマラソン、ボール運動。後のひとつが「創」の活動。創造的知性を磨く自学。読書する子どもが多いが、算数の問題など、それぞれの興味・課題への挑戦の活動である。



このような「愛生創の活動」は、もう三十数年間続けられており、始業前の活動とはいえ、本校の特色ある教育活動の一つとなっている。自覚的に自己を形成する人間学校の実現をめざし、次の①～③のような子どもを育てることを目標として、行っているはぐくみ活動のうちの一つの活動である。

① やさしい心をもつ子ども…「愛」をはぐくむ

ともに自己の尊厳を認め合い、自他を愛する姿、子どもはどの子も愛のある学校生活の中に安定した状況を得る。愛は、また博愛であり、克己であり、畏れであり、自然愛であり、母校愛である。その「愛」のころを自らの中に育む。

② 体力と気力があり、たくましく生きぬく子ども…「生」をはぐくむ

「生」とは、生きぬく力である。バイタリティであり、活力であり、自らを自覚していく力である。体と体のぶつかりあいの中から体得する力であり、ものごとに熱中し、あるいは歯をくいしばってやりぬく気力であり、強靱な意志でもある。

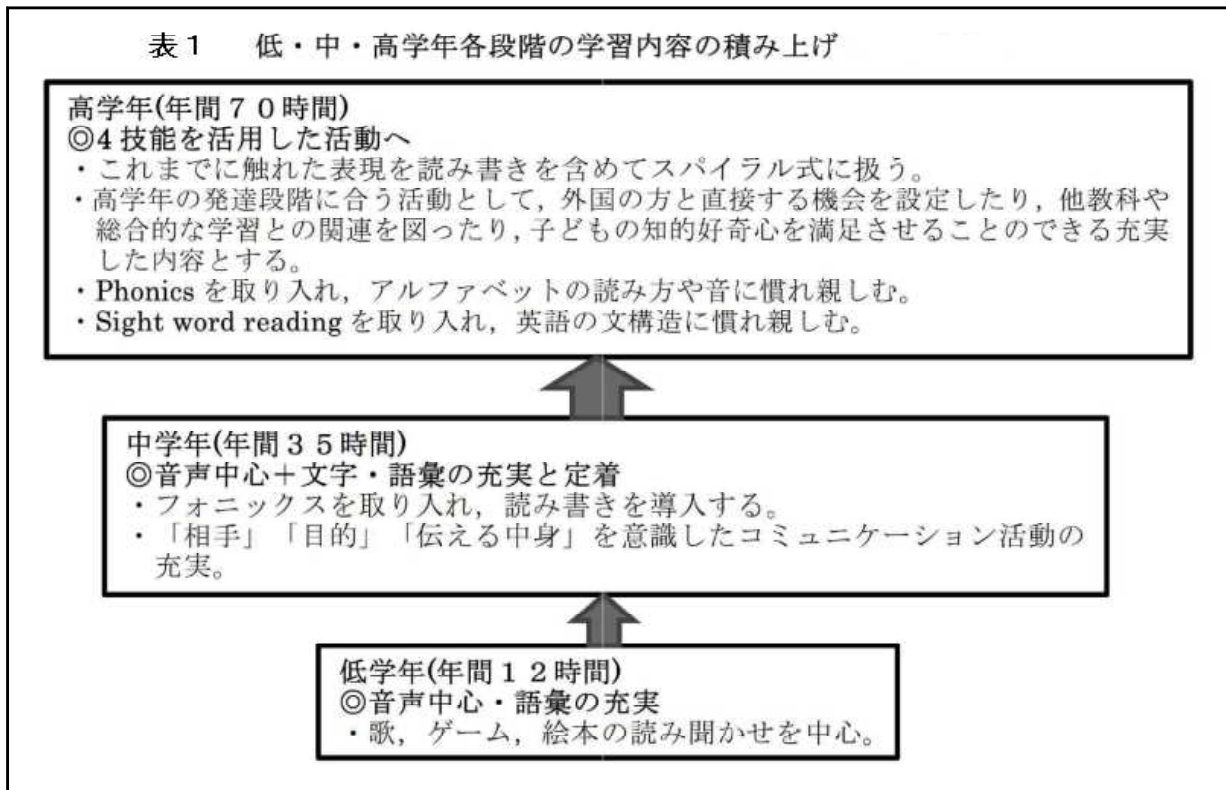
③ 創造的知性をもつ子ども…「創」をはぐくむ

自覚的自己形成における教育の三大原理は、自主・共同・創造である。とりわけ、創造的知性の開発は、教育の根源である。

2 大学の「小学校英語教育センター」と連携した小学校英語教育プログラムの開発と実践

(1) 目的

今回の学習指導要領改訂での英語の教科化を見据えて、先駆的でかつ持続可能な小学校英語教育プログラムを開発し、本校で実験的に実践して検証する。さらに、附属中学校との連携した小中一貫のプログラム開発も視野に入れて研究を進める。



(2) 取組の概要

表1に示すように、「話す・聞く」の技能だけでなく、「読む・書く」の技能も生かした学習内容を設定し、それに従って、授業実践を行い、英語教育のカリキュラム開発を行っている。このカリキュラムは、教科化された後には、一般化できるものである。

昨年度までの実践を通して、3・4年生での英語活動のカリキュラムは、まとまってきた。今後は、実践を通して、よりよい方向に修正していく。5・6年生については、昨年度までの実践をもとに、本年度から週2時間のカリキュラムでの実践を行っている。その中での課題を洗い出し、持続可能なものへ修正予定である。



5年生の授業風景

地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか：

地域住民から見た本校は、昔のような特別な学校というイメージから、地域にある学校の一つという見方をされるようになってきた。これには、次のような要因が考えられる。

- ①子どもたちが学習の中で、地域へ出かけることが多くなり、学校近所の方々との交流が多くなったこと。
- ②阿波踊りや遊山箱作りなど、地域住民の方をゲストティーチャーとする学習が増えたこと。
- ③保護者による毎朝の交通立哨や学校周辺の清掃活動などで地域への貢献が増えてきたこと。
- ④運動会やオープンスクール等の行事のときに学校近辺の町内会へ招待状を出して、参加呼びかけを行ったこと

県下全体から見た本校は、授業実践や学校運営、施設設備、保護者会活動などの面においてモデル校としての存在である。特に授業実践においては、小学校教育研究会の各部会における研究推進役と務めたり、自主的な研究サークルを運営したりすることで、県下全体を牽引している。

附属学校の存在意義、貴校の存在意義について：

附属学校には、義務教育学校としての存在意義、研究学校としての存在意義、教育実習学校としての存在意義、地域（県下）への奉仕学校としての存在意義が考えられる。

本校も前述の通り、地域に根ざした義務教育学校として、「人間学校」の理念に基づき、子どもたちの心身の健全な発達をめざすとともに、例としてあげた英語学習のように、先進的にかつ他の公立学校でもすぐに取り入れられる内容の研究を行い（研究学校）、それを、県下全体へ発信している（奉仕学校）。発信の方法としては、研究発表会もあるのだが、それよりも、各校の授業研究会において、共同研究をしたり助言をしたりする活動や、各教科部会や自主的な研究サークルでの研究協議などの活動が実際には効果的であった。実習校としては、現在、鳴門教育大学は、学部生の教員就職率が6年連続全国1位であるが、本校での実習もその一因であると自負している。さらに、地元の徳島大学からも毎年教員志望の学生の観察実習を受け入れるとともに、本校教員が授業へも出向いている。